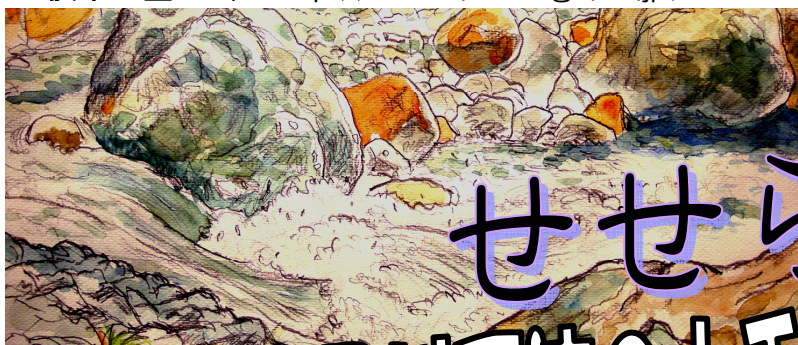




金目川水系流域ネットワーク

世話人会

せせらぎ通信

金目川下流の土手と河原の清掃 募集!

3月11日(日) 9時30分開始

申込先 府川清 0463-34-7475

○ 日時 平成24年3月11日(日) 午前9時30分～

○ 集合 花水橋もと(大磯側) 空き地 朝9時15分

○ 作業地 花水橋・高麗大橋界隈の右岸(大磯側) 左岸(平塚側)

○ 服装等 長靴、手袋、ごみハサミほか

○ 参加予定者 金目川水系流域ネットワーク 丹沢山塊の自然を考える会
サムライなでしこ草刈り隊、相模川湘南地域協議会 他
が、ともに活動いたします。



砂浜環境は、強い日差し、乾燥、砂の吹き付け、塩分などがあるため、多くの陸上植物の生育にとっては非常に厳しい環境になっている。しかし、それらの厳しい環境に適応することで一部の海浜植物たちはたくましく生きている。適応の度合いは、植物の種によって異なるため、汀線から内陸地へかけての環境傾度の変化とともに定着種は変化する。

1. 砂浜の環境と海浜植物

日時 2011年12月17日(土) 13時40分、14時40分
場所 ひらつか市民活動センター会議室
基調講演者 東海大学教養学部人間環境学科自然環境課程

自然環境保全の大切さを考える集い
演題 湘南海岸の海浜植物

准教授 藤吉正明



2. 砂浜に生育する海浜植物の分布と群落面積

湘南海岸には、内陸地の植物も含め多くの植物が生育しているが、砂浜特有の在来植物に着目してみると20種程度である。その中の17種を調べた結果、優占的に全域に定着している種(コウボウムギ・ハマヒルガオなど)や、点在して疎らに生えている種(ハマボウフウ・ケカモノハシ・コウボウシバなど)、生育場所が限られていて局所的に定着している希少種(ビロードテンツキ・ハマニガナ・オニシバなど)、国内の他地域から移植された移入種(ウンラン・ハマニシクなど)に分けることができる。

3. 市町村地域の特徴

多くの海浜植物種が生育している種多様性の高かった砂浜は、大磯町のこゆるぎの浜、平塚市の虹ヶ浜、茅ヶ崎市と藤沢市の境の砂浜であった。また、湘南海岸には、人工物や河川で区切られた結果、5つほどのまとまった大きな海浜植物群落が存在していた。

4. 海浜植物保全の必要性

湘南海岸は、地域の観光資源であるため、様々な人間活動に利用されている。美しい砂浜景観の一要素として、海浜植物は重要な役割を担っている。今後も種多様性の高い海浜植物群落が存在し続けるためには、広い砂浜の確保や外来種駆除、希少種保護等の環境保全対策が必要である。

砂浜の確保のために、現在各地で起きた海岸浸食（茅ヶ崎市や大磯町など）を防止するための養浜工事が行われている。

現在、海浜植物群落の中には、外国から持ち込まれた外来種（オオフトバムグラ・アメリカネナシカズラ・コマツヨイグサなど）が多く侵入している。より望ましい海浜植生にするために、それらの駆除が望まれる。湘南海岸には、個体数が少

なくなった海浜植物が数種（ヒロードテンツキやハマニガナなど）存在する。

種多様性を確保するために、それらの保護活動も必要である。

このような対策により、海浜植物も生育できる美しい砂浜景観が維持されることが望まれる。

現在、海浜植物群落の中には、外国から持ち込まれた外来種（オオフトバムグラ・アメリカネナシカズラ・コマツヨイグサなど）が多く侵入している。より望ましい海浜植生にするために、それらの駆除が望まれる。



パネルディスカッション（講演当日のコメントです）

金目川水系流域ネットワーク 代表 柳川三郎

本日は「自然環境保全の大切さを考える集い」「市民が結ぶ森と川と海をつながり」にご参加いただきありがとうございます。

私は金目川水系流域ネットワーク代表の柳川と申します。

ただ今の藤吉先生による基調講演を含めてパネルディスカッションを進めてまいります。

パネラーには丹沢山塊の自然を考える会の代表鈴木盛彦さん、

里山をよみがえらせる会代表小清水四郎さん、相模川湘南地域協議会代表峯谷一好さん

相模貝類研究談話会代表福田良昭さん、水害防備林活動家石野和男さんと基調講演の藤吉先生に加わっていただき、パネルディスカッションを行います。

これから皆様に豊かな森づくりや、豊かできれいな川、ごみのない豊かな海を、目指しての活動発表をお願いいたします。その前に私から少しコメントをいたします。

11月に、8ヶ月たった東日本大震災の被災地を訪れ、防備林の松等が津波ですべて破壊され、海辺の干潟が無くなって

しまっているところや、川が海にそそぐ河口が変に蛇行している姿を見ると、地震と津波の猛威の前にはすべて無になりましたが、今回の被害を乗り越えて新しい自然創りが始まっていました。

私はその姿を見て、人は又、松を植え干潟の復活に英知を注ぐと確信しました。

今日は、身近なこの地の自然がどの様に変化しているか、そして、パネラーの皆様がどの様に自然保全に頑張っているかをディスカッションいたしてまいります。



金目川に寄せて

黒部栄三

私は中郡金目村（現平塚市南金目、太田地区）の金目川のほとりで生まれました。家は小さい農家で言い換えれば「水飲み百姓」でした。米のほとんどは現金に換えるため、供出（農協に出荷）し、普段は麦飯の混じった御飯を食べていました。真っ白い御飯が食べられるのは盆と正月、そしてお祭りの時だけでした。稲や麦の取り入れ時は一家総出で作業し、昼食は家に帰る時間を惜しんで野良弁といって田んぼや畑で食べました。



お金が無くくらしは貧しくほとんど自給自足であったけれど隣近所とも助け合い家族が力を合わせて懸命に生きてきました。

家が暇な時は山や川で遊びました。メンコやビー玉、鬼ごっこや竹馬など、上級生も下級生も入り交じって日の暮れるまで遊んだものでした。子どもの頃の金目川は今より水量が豊富できれいでした。夏は上流の滝沢（土屋橋のやや下流）と呼ばれていた場所に行きました。そこはちょうど流れが当てる場所で、深さは3mくらい有り、土手の上から飛び込みなどもしました。体が冷えると河原に横になり暖まったらまた泳ぎました。そこにはウグイという体長が30センチにもなる魚もいて、竹竿の先にモリを付け、手元にごみを付けたモリで、良く魚を突きました。飽きると岸に上がり平たい石を選び川に投げ、何回水面を飛びか競争したものでした。金目川は本来田んぼに水を引くための川で、多くの水門が作られています。



金目からの大山

田んぼに水が引かれる頃、夕方になるのを待って昼間とっておいたミミズを入れた「もじり」を用水路に仕掛け、翌朝早く揚げに行きます。夜行性のうなぎを取るためです。モジリを上げる時はドキドキしたものでした。取れた大きいうなぎは泥を吐かせるため「たらい」に暫く入れておき、頃合いを見てさばき、蒲焼きにしました。金目川は多くの楽しい場所を与えてくれましたが、ひとたび台風などで大水が出ると大変です。家のすぐ裏に下の川という小さな川が流れていて、本流の金目川の水が増えるとその下の川の水が

流れなくなってしまう、



金目川に架かる「観音橋」からの金目観音

徐々に溜まっていきます。そうになると地盤が低い我が家に流れ込んできます。土間の下駄が浮き始めると、急いで畳を上げ増水に備えます。私の記憶では近くの堤防が切れたことはなかったが上流部で何回か切れたことがあり、車が何台か落ちたことがあります。

水が引いたあとはまた楽しみがあります、川岸の草に沢山の魚が集まっているからです。竹み（竹で編んだみ）を水中に沈め、足を上下に動かし魚を「み」の方に追い立てます。そうすると普段取れない大物がみの中に入ります。

最近では農業をする人が高齢になり、跡を継ぐ人も少なくなってきました。農業の営みには多くの良い要素があります。例えば田んぼは大雨の時の遊水池機能や地下水を蓄えたりします。また青々とした水田や秋の黄金色に輝く稲は私たちの心を和ませてくれます。生きものを育んだり、気温が急に上がるのを和らげます。

日本の伝統・文化は稲作が始まった弥生時代から始まったと言われており、現代でも稲の豊作を願ったり、豊作を感謝したりするお祭りが各地で行われています。南金目神社では十月十日近辺に秋の実りに感謝する例大祭が行われています。現在の我が家の裏は田んぼが広がっていて、夏はエアコンが要らないほど涼しい風が吹いてきます。最後になりますが、多くの人達に金目川を始め素晴らしい自然に親しんで戴き、金目の良さを知り、故郷にしてもらえたらと思います。

写生

会員の岩本勲 作品

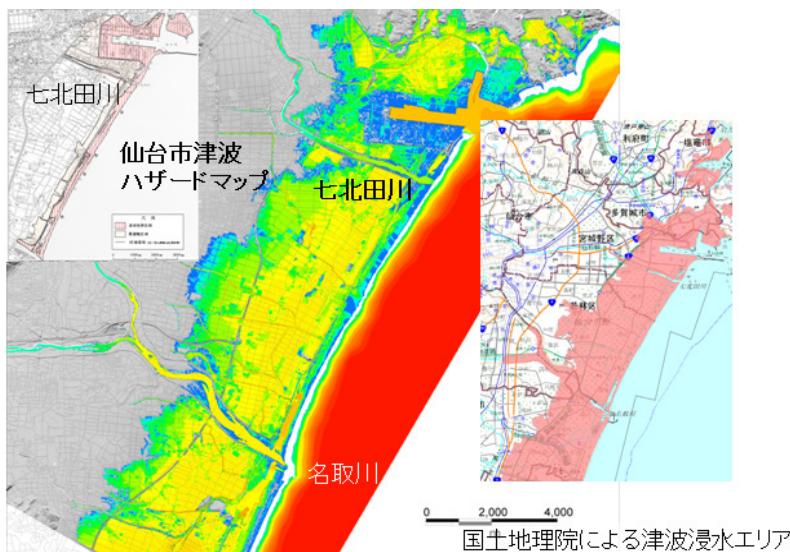


「湘南里川づくりフォーラム2012」を開催しました！

去る平成24年1月29日(日)、東海大学湘南キャンパス13号館において「湘南里川づくりフォーラム2012」を開催しました。

「湘南里川づくりみんなの会」発足後としては初めてとなる今回のフォーラムでは、金目川水系の現状を知っていただくため、東海大学大学院人間環境学研究科から金目川水系の水質調査結果を報告した後、「湘南里川づくりが目指す金目川水系」～身近な川を親しみ愛される川へ～をテーマにパネルディスカッションを行いました。

湘南里川見守り隊のみなさんをはじめ県内各地域からお集まりいただいた142人の参加者によって貴重な意見が交わされ、一人ひとりが課題を実感し自らの問題として捉え環境に配慮した生活や責任ある行動をとらなくてはならないということ、そして、流域の環境保全活動を支えるネットワークの必要性を改めて再認識させられた有意義な1日となりました。【「湘南里川づくりみんなの会」事務局】



仙台平野の津波シュミレーション結果

(仙台市の津波ハザードマップよりはるかに広域にわたり津波が押し寄せた。)



3. 11を超えて

西岡 哲

2011年3月11日14時46分、マグニチュード9の東北地方太平洋沖地震が発生し、我が一生で経験することなど想像をしなかった巨大津波の姿を伝えてくる映像に、自然の猛威に驚愕させられた。想定外(？)の地震と巨大津波に多くの尊い命が犠牲となった。さらには想定外(？)の津波により全電源喪失した福島第一原子力発電所は、原子炉の冷却が不能となり水素爆発を起こし大量の放射性物質を環境中に放出した。

高度経済成長を経験し豊かさを追い求めてきた私たちは、自然と真摯に向き合うことを怠ってきたのではないだろうか？

地球を覆っている十数枚のプレートのうち4枚のプレートの衝突部にある日本列島は、世界でも有数の地震大国である。過去90年間でマグニチュード7以上の地震は90回ほど発生しているが、そのうち10%が日本で起きている。台風は毎年上陸し、昨年の台風12号、15号は各地に洪水や土砂崩れの爪あとを残した。

物理学者の寺田寅彦は昭和三陸津波(1933年)を体験し、自然とは過去の習慣に忠実であり、執拗に繰り返しやってくると言った。

果たして今回も忘れずにやって来た。百年にも満たないわずかな時を経ただけで、忘れてしまったのは人間である。もしかしたら、経済性や便利さを優先し、自分に不都合な真実をあえて見ようとしてこなかったのかもしれない。災害列島日本はモンスーンアジアの中にあり、豊かな水の恵みにより農耕が発達し、豊饒の海の恵みを受け発達してきた。だが、自然には女神と破壊神が同居していることを、忘れてはならない。

国土交通省は3・11震災を踏まえた今後の治水システムのあり方の中で以下のようにまとめている。

1 災害に上限はない。

2 過去に学ぶ

3 災害の連鎖を断ち切る。

4 透明性・客観性を確保する。

国は国民の生命財産を守るため、防災対策を講じなければならない。しかしハードだけで自然をねじ伏せることは出来ないことは、今回の災害で学んだ。

自然災害からわが身と家族を守るには、普段から自然と付き合うことが大事である。自分の住んでいる土地の自然をわが目で観察することにより、自然の豊かさと恐ろしさを学ぶことが出来る。金目川水系流域ネットワークの活動の原点がここにある。